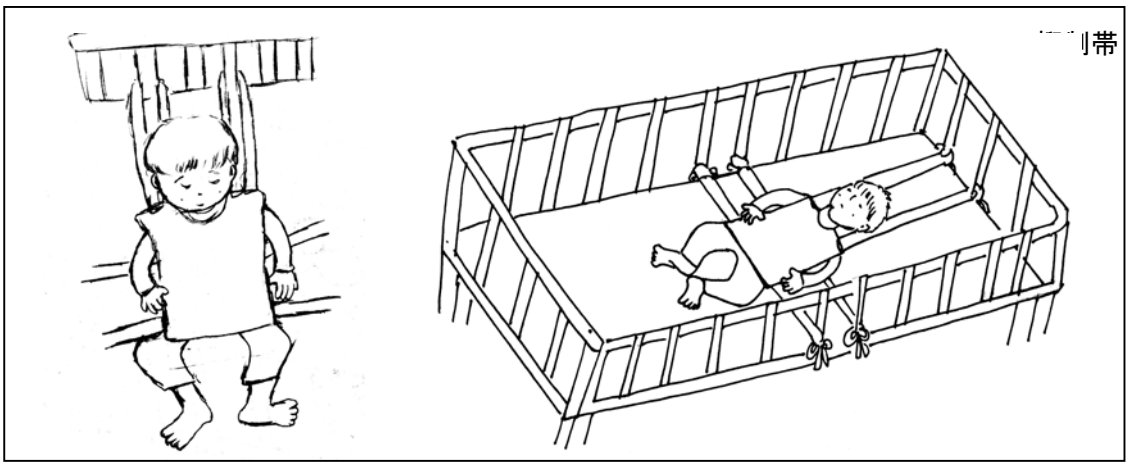
オンブ紐にもなった手作りの小児の体幹固定抑制帯



看護用品の解説

古くなったシーツを看護婦が裁断して，患児の体幹を押えられるように工夫して抑制帯を作った。

看護用品にまつわるエピソード

当時（昭和 31 年頃）は病院では家族の付き添いが当たり前であったので，点滴中は家族が側についていた。しかしワーターさん（ワーター・ワース女史）が家族による付き添いを廃止したことから点滴中は患児が暴れると危なかったので抑制帯を使っていた。この抑制帯は患児が夜間泣いたりした時にはオンブヒモとして使ったこともあった。オンブしながら他の患児のオムツを交換したりしていた。

またワーターワースさんは，実際に病棟に来て付き添っている家族に対して，看護婦が見るので家に帰るように話していたことがあり，ハラハラしながらそれを見ていた。当然家族も驚いていたが，結局ワーターさんのいうのに従っていた。

（西平富美子氏，2004）

解説

体幹固定用の抑制帯を作るきっかけとなったものとして，ワーターワース女史の家族による付き添いを廃止したことがあげられる。沖縄県の看護制度に関するワニタ・ワータース女史の功績は多くの方が述べており，そのなかのひとつとして古謝フミ子氏は「近代看護の方向づけと全琉各地区のリーダー的看護婦を集め，三交代制のモデル病棟をつくり，付き添い廃止の近代的患者看護の体制を敷いた」[1)]と述べている。また金城サエ子氏は「1950 年ワーターワース女史が着任されて…直に専門的知識のない家族や面会人による患者回復への影響…再教育講座が行われ，ついに家族看護の廃止…が実施に移されました。長い間習慣的になっていたことからの改革は非常に大きな問題で初めは医師も看護婦だけではやってゆけないと反対し色々問題もありましたが徐々に協力が得られるようになった」[2)]と述べている。このように看護婦のリーダー的存在の再教育や医師への説得を行いながら，患者の家族に対しても改革を働き掛けたワーター女史の働きは，当時の看護職者の模範となったと思われる。

1）沖縄県看護協会：看護の限りない可能性を求めて　創立 50 周年記念誌，P164，2001.
2）琉球看護婦協会：琉球看護婦協会　創立十周年記念誌，P14，1961.

（金城忍，2004）